

《資 料》

太平洋諸島における居住様式の研究 [資料]

杉 本 尚 次

1. は じ め に

居住様式の問題は、居住文化景観として、人間社会の存在するところ、みのがすことの出来ない要素である。

居住様式の研究は社会学・地理学・民族学・民俗学・建築学など多くの分野から、それぞれ固有の方法による研究が集積されている。これらの研究は、各分野の調査資料や文献によって、限定された範囲で関連科学との資料の交流も不十分なまま進められた場合が多い。今後の居住様式の研究は、それが関連している総ての分野に連帯性をもたせ相互批判を通じて充実をはかることが必要と考えられる。この意味で筆者は日本および欧米諸国の居住様式の研究展望を行なった¹⁾。

本資料は太平洋諸島（ポリネシア・メラネシア・ミクロネシア）に関するものであるが、次いで東南アジア地域の研究資料も集積する必要がある。これは全世界の居住様式研究、比較考察の資料集積という点で重要である。

1) 杉本尚次「民家研究の展望—成果と動向—」(『日本民家の研究』ミネルヴァ書房, pp. 2-43, 1969)。

2. 広 域 の 研 究

広大な太平洋地域の科学的調査は、18世紀に行なわれたクックの3回にわたる探検以来散発的にみられた。戦後はヘイエルダールによるコンチキ号の漂流およびイースター島の発掘が世界の注目を集めている。

アメリカの人類学者 F. M. Keesing の『ポリネシアにおける社会人類学的研究』の引用文献をみれば、主なものだけでも950篇が挙げられており、各学問分野から茫大な業績が集積されていることがわかる。これら太平洋地域に関する文献は

ハワイのホノルルにあるビショップ博物館図書室に完全に近く集められている。1965年これら文献に接する機会を得たのであった。居住様式に関しては、H. Tischner の『Die Verbreitung der Hausformen in Ozeanien』¹⁾に350篇におよぶ文献が示され、先述のように各分野からの研究が進んでいることを知ることができる。この研究は1934年のものであるから、その後の諸研究を加えれば相当な量に達する。この数多い業績の多くは個々の島々の詳細なモノグラフィックな地域研究であり、その中の物質文化の一部として居住様式(住居)を取扱っている。とくにハワイのビショップ博物館(Bishop Museum)の研究報告書(Memoirs と Bulletins)は調査項目がほぼ揃っている優れたモノグラフであるが、これも調査者個人の特色がかなり濃厚に出ている。P. H. Buck のサモアに関する物質文化の研究²⁾などその中の出色のものといえよう。

単独に住居を取扱った研究も多いが、住居は生活文化の中で最も人目につきやすく、旅行記の類などの中に住居をめぐる記述がよく見られる。とくに19世紀の航海記などに優れた住居の記述を行なっているものがある³⁾。

個々の研究から進んで総括的な立場で太平洋諸島全域の住居を取扱った H. Tischner の研究。世界的視野で「四角い家と円い家」を文化史的に論じた E. Werth の研究など⁴⁾ 特筆すべきものである。

住居を含む「太平洋諸島文化の展望」は、藪内芳彦の3研究⁵⁾と石川栄吉の「オセアニア研究」⁶⁾をあげることができる。家屋の骨組や方形・円形などプランについて民族学的・考古学的立場で世界的に論じた大林太良⁷⁾・中村たかを⁸⁾の研究も重要である。筆者は1965年の調査にもとづき「太

平洋地域における居住様式の分布」⁹⁾を、さらに、1968年東南アジア調査資料を加えて東南アジア・太平洋地域とわが国住居の比較研究を試みた¹⁰⁾。

- 1) Tischner, H., Die Verbreitung der Hausformen in Ozeanien, Studien zur Völkerkunde 7. Leipzig (1934) 350 余の文献はドイツ学者によるものが 70 %余を占め、とくにミクロネシア・メラネシアの旧独領地域のものが多い。
- 2) Buck, P. H., (Te Rangi Hiroa) Samoan Material Culture, B. P. Bishop Museum Bulletin 70. pp. 8—97 (1930)
- 3) Narrative of the U. S. Exploring Expedition, vol. II (1849)
- 4) Werth, E., Grabstock Hacke und Pflug, Die Baukunst. pp. 245—259 (1954). (飯沼二郎・藪内芳彦訳『農耕文化の起源』岩波書店, 1968) Werthは太平洋諸島に関しては、その文化複合体を農耕、家畜、家屋型、鉄・石斧のつけ方、酒造り、土器作り、機織りの7つの文化要素の結合として問題にしている。
- 5) 藪内芳彦『ポリネシア—家族・土地・住居—』(大明堂, 1967)
藪内芳彦「太平洋諸島文化の研究(展望)」(『人文地理』15の4, pp. 65—81, 1963)
藪内芳彦「ポリネシア民族ならびに文化の起源に関する覚書」(『人文研究』13の1, pp. 1—23, 1962)
- 6) 石川栄吉「オセアニア」(『民族地理』(上) pp. 228—287, 朝倉書店, 1965)
- 7) 大林太良「住」(『人間の文化』2 現代文化人類学, pp. 102—125, 中山書店, 1959)
- 8) 中村たかを「住居の起源」(『世界の民族』河出ペーパーブックス, pp. 202—214, 1964)
- 9) 杉本尚次「太平洋地域における居住様式の分布」(藪内芳彦『ポリネシア』所収, pp. 136—163, 大明堂, 1967)
- 10) 杉本尚次「日本民家の南方的要素について—東南アジア, オセアニア地域との比較—」(『日本民家の研究』ミネルヴァ書房, pp. 218—243, 1969)

3. ポリネシア

ポリネシアは、ハワイ—ニュージーランド—イースターを結ぶ広範な地域であり、各島嶼の個別研究が多いが、とくにハワイとニュージーランド(マオリ)の住居の研究が進んでいる。

ハワイではビジョップ博物館の調査報告の中で W. T. Birgham がハワイの伝統的な家屋構造を解説し、ポリネシアの他の主要な島における住居

を検討している¹¹⁾。館長であった P. H. Buck の詳細なハワイの家屋研究もみのがせぬものである¹²⁾。ニュージーランド(マオリ)の住居についてはドミニオン博物館(Dominion Museum)の刊行物の中に P. William の研究¹³⁾や、伝統的マオリの生活誌をまとめた E. Best¹⁴⁾のものがよく整備されている。その他ポリネシア評論誌¹⁵⁾の中にも諸報告がみられる。とくに彫刻技術が発達し、方形(長方形)の地面住居や高床式の倉、壮大な集会所など特色である。現在は欧風化が進み、ロトルア(Rotorua)にはマオリ村落や住居の復原が(観光的要素)みられる。近年のマオリの都市集中現象や住宅問題にふれた報告¹⁶⁾もみられるし、欧人とマオリとの居住諸指標の比較¹⁷⁾などニュージーランドの民族的二重構造の一面として興味あるものである。

ポリネシアの最東端イースター島に関する研究は、ハイエルダールの考古学的発掘によってその名を高めたが、従来から諸学者による民族誌が集積され、その中に住居に関する考察が含まれている。とくにフランスの人類学者 A. Metraux の研究¹⁸⁾が詳しい。

マルケサス諸島に関しては、R. Linton のマルケサスの物質文化¹⁹⁾や、C. Handy の報告¹⁰⁾が伝統的住居を取扱ったものとして知られている。近年神戸大学の学術調査隊員として現地調査した石川栄吉のマルケサス(ファツヒバ島)の居住様式¹¹⁾は、村落社会との関連にもふれた重要な研究である。

ツアモツ諸島では、P. H. Buck のマンガレバ島¹²⁾の報告。プカルア島に関する畑中幸子の報告¹³⁾にも生活体験を通しての住居に関する記載がみられる。隔絶的なピトケルン島は、バウンティ号叛乱者の住みついた島であり、居住様式も他のポリネシアの島々とは異なっているが¹⁴⁾、無人島に新しい人間社会が形成された例として多くの興味ある問題を提供している。

タヒチでは近年とくに観光化による伝統的文化の消滅が著しく、ホテルの建築に伝統的家屋型式が導入されたりしている。タヒチ島を含むソシエテ諸島の伝統的住居に関しては C. Handy の詳しい報告がみられる¹⁵⁾。

オーストラル諸島ではソブアイ島の研究¹⁶⁾があ

る。クック諸島ではアイツタキ環礁を中心とした P. H. Buck の物質文化¹⁷⁾。ラロトンガ島とアイツタキ島についての Beaglehole 夫妻の研究¹⁸⁾も、それぞれ住居にふれている。

北部クック諸島では、トンガレバ島¹⁹⁾、マニヒキ島、ラカハンガ島²⁰⁾、プカプカ島²¹⁾。その他南部クック諸島のマンガイア島²²⁾の報告がある。

トンガ王国に関しては、Beaglehole 夫妻のパンガイ (Pangai) 村の調査²³⁾や、Mckern の物質文化研究²⁴⁾が古典的なものとして知られている。1960年京都大学のトンガ調査に関する藪内芳彦の報告²⁵⁾や青柳真知子のトンガ住居の研究²⁶⁾、オーストラリアの新進地理学者 A. Maude のトンガ研究²⁷⁾などをあげる。A. Maude の研究は人口を主軸にしたものであるが村落や住居にもふれており、人口増加による将来の土地利用の問題にも言及した注目すべきものである。統計資料としては1956年センサスに住宅関係統計(材料別・家族人員別)が整備され、比較検討の素材を提供している²⁸⁾。筆者は、1965年トンガタブ島プケ部落の調査を行ない、主屋と炊事棟を別棟とする居住様式や、楕円プラン住居の優占、さらに方形プラン住居の混在からメラネシアとの交界地的性格を指摘した²⁹⁾。トンガ近辺ではニウエ島の報告³⁰⁾がある。

サモア諸島に関しては数多くの文献があり、西サモア共和国の首都アピアの国立図書館では、これら文献をよく整備している。中でも A. Krämer³¹⁾ や G. Turner³²⁾ の研究は19世紀のサモアの状況把握に欠かすことのできぬものである。A. Krämer は大著『サモア諸島』の第Ⅱ巻人類学および社会学的研究の中で家屋をとりあげ、その構造を細部にわたって記述し、建築作業面にも及んでいる。アメリカ合衆国の調査艦隊の航海記にもサモアの村落や住居について記録している³³⁾。サモアの住居研究では、P. H. Buck の『サモアの物質文化』³⁴⁾が最も詳しく、約100頁にわたって主として形態別、構造別に調べあげている。最近ではオークランド大学地理学教室の西サモア共同調査をまとめた K. B. Cumberland と J. W. Fox 編の『西サモア』³⁵⁾。優れたモノグラフである L. D. Holmes の東サモア(米領)マヌア諸島タウ村の研究³⁶⁾でそれぞれ住居をとりあげている。L. D. Holmes の場合、物質文化として住居を大

きく扱い、A. Krämer など諸先学の調査資料と現状との比較を行ない、その変化を記述している。その他サモア関係の文献に住居関係の記載が散見されるが、前記のように建築技術、構造面の研究が大半を占め、とくに柱組や A'fa (ココヤシの繊維で作ったロープ) の結びかた、マットの編みかたなど詳細を極めている。その反面、住居と村落社会との関連や、統計的な分析が少ないといえよう。筆者の1965年の西サモアにおける2村落の調査は、このような点を考慮しつつ、第1報として居住様式を中心とした村落構造の分析を行なった³⁷⁾。

サモア周辺ではトケラウ諸島³⁸⁾、ウベア島³⁹⁾、フツナ島⁴⁰⁾の民族誌がある。

地理的にはミクロネシアに入っているが、文化的には明らかにポリネシアに含まれるカピンガマランギ環礁の研究⁴¹⁾⁴²⁾も戦後行なわれたものとして注目してよいものである。とくに戦前との比較を示す資料が注意され、また家屋構造、名称のポリネシア的要素を窺うことができる⁴³⁾。ポリネシア全域の住居建築を取扱った M. Mead の研究⁴⁴⁾は比較研究の方法として重要なものといえよう。

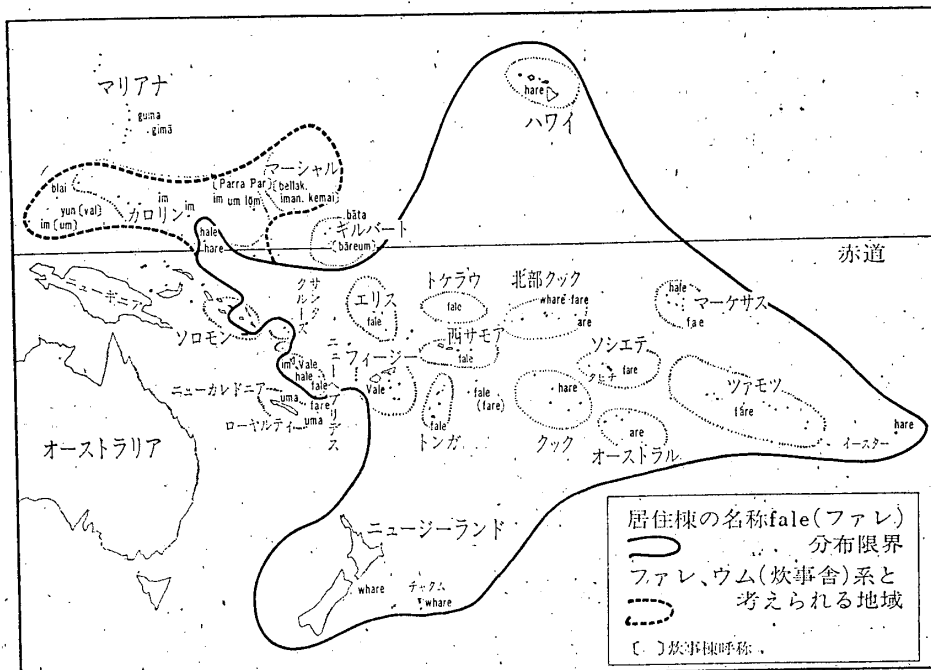
- 1) Birgham, W. T., The Ancient Hawaiian House, B. P. Bishop Museum Memoirs, Vol. II, No. 3 (1908)
- 2) Buck, P. H., House (Arts and Crafts of Hawaii, III) B. P. Bishop Museum Special Publication 45 (1964) 同書の文献目録にハワイ関係のものが収録されている。ハワイではビショップ博物館内にハワイの住居復原(実物大)がある。オアフ島北東部ライエ (Laie) にポリネシア文化センター (Polynesian Cultural Center) があり各地の住居が集められている。ワイキキに近いウルマウビレッジ (Ulu Mau Village) にも伝統的ハワイ家屋の復原が展示されている。
- 3) William, P., Maori Houses and Food Stores, Dominion Museum Monograph, No. 8, pp. 15-18 (1952)
- 4) Best, E., The Maori life as it was in Pre-European days, pp. 239-258, Wellington, Gov. Printer (1952)
- 5) Williams, H. W., The Maori Whare: Note on the construction of Maori house, The Journal of the Polynesian Society, Vol. 5, pp. 145-154 (1896) その他。ポリネシア評論誌はニュージーランド、ウェリントンにあるポリネシア協会発行の季刊

- 誌。太平洋地域（オセアニア全域）の原住民の研究を中心としている学術雑誌である。1892年創刊。
- 6) Metge, J., *A New Maori Migration: Rural and Urban Relation in Northern New Zealand*, London School of Economics Monograph on Social Anthropology, No. 27 (1964).
- 7) Metge, J., *The Maoris of New Zealand*, pp. 66—84, Kegan Paul (1967).
- 8) Metraux, A., *Ethnology of Easter Island*, B. P. Bishop Museum Bulletin, 160, pp. 192—204 (1940).
- 9) Linton, R., *The Material Culture of the Marquesas Islands*, B. P. Bishop Museum Memoirs Vol. VIII, No. 5, pp. 271—297 (1923).
- 10) Handy, C., *The Native Culture in the Marquesas*, B. P. Bishop Museum Bulletin, No. 9, pp. 150—154 (1923).
- 11) 石川栄吉「Fatuhiva島（フランス領ポリネシア・マルケサス群島）の人口と集落」（『民族学研究』29-1, 居住様式 pp. 48—56 (1964).
- 12) Buck, P. H., *Ethnology of Mangareva*, B. P. Bishop Museum Bulletin, 157, pp. 228—242 (1938).
- 13) 畑中幸子「Pukarua Atollにおける社会・経済の変化」（『民族学研究』31—3, pp. 203—216, 1966）『南太平洋の環礁にて』（岩波新書 653, 1967.）
- 14) Neill, J. P., *Ten years in Tonga*, Hutchinson, London (1955). 1924—33年の Tonga 滞在中にピトケルンを訪問したときの記録 pp. 160—161 に住居の記載がある。
- 15) Handy, C., *Houses, Boats and Fishing in the Society Island*, B. P. Bishop Museum Bulletin, 90, pp. 1—38 (1932).
- 16) Aitken, T., *Ethnology of Tubuai*, B. P., Bishop Museum Bulletin, 70, pp. 48—52 (1930).
- 17) Buck, P. H., *The Material Culture of the Cook Islands (Aitutaki)* New Plymouth, pp. 1—38 (1927).
- 18) Beaglehole, E. and P., *Social Change in the South Pacific (Rarotonga and Aitutaki)* George Allen, pp. 159—161 (1957).
- 19) Buck, P. H., *Ethnology of Tongareva*, B. P. Bishop Museum Bulletin, 92, pp. 93—100 (1932).
- 20) Buck, P. H., *Ethnology of Manihiki and Rakahanga*, B. P. Bishop Museum Bulletin, 99, pp. 70—82 (1932).
- 21) Beaglehole, E. and P., *Ethnology of Pukapuka*, B. P. Bishop Museum Bulletin, 150, pp. 109—121 (1938).
- 22) Buck, P. H., *Mangaian Society*, B. P. Bishop Museum Bulletin, 122, p. 135 (1934).
- 23) Beaglehole, E. and P., *Pangai, The Polynesian Society*, pp. 10—12, pp. 68—70 (1941).
- 24) Mckern, W. C., *Tongan Material Culture*, manuscript in Bishop Museum.
- 25) 戴内芳彦『トンガ王国探検記』pp. 115—118, 204—205, 角川文庫 (1963).
- 26) 青柳真知子「トンガ人の住居」（『民族学研究』27—4, pp. 55—58, 1963).
- 27) Maude, A., *Population, Land and Livelihood in Tonga*, タイプ印刷 (1965).
- 28) 1956年 Census, pp. 39—40, Housing, 87—91, 材料別, 構造別, 島別, 村落別に整理されている。
- 29) 2の註(9)前掲書。
- 30) Loeb, E. M., *History and Traditions of Niue*, B. P. Bishop Museum Bulletin, 32, pp. 90—91 (1926).
- 31) Krämer, A., *Die Samoan-Inseln (Entwurf einer Monographie mit besonderer Berücksichtigung Deutsch-Samoas) II, Der Hausbau*, pp. 221—242, Stuttgart (1902).
- 32) Turner, G., *Nineteen years in Polynesia, Houses*, pp. 256—265, London (1861).
- 33) 2の註(3)前掲書。
- 34) 2の註(2)前掲書。
- 35) Fox and Cumberland., *Western Samoa, Land, Life and Agriculture in Tropical Polynesia*, Whitcombe, Tombs (1962).
- 36) Holmes, L. D., *TĀU —stability and change in a Samoan Village—*, pp. 3—5, *The Polynesian Society*, Wellington (1958).
- 37) 杉本尚次「西サモアの村落、一居住様式を中心として」（『民族学研究』31—3, pp. 179—202, 1966).
- 38) Macgregor, G., *Ethnology of Tokelau Islands*, B. P. Bishop Museum Bulletin, 146, pp. 123—129, 170 (1937).
- 39) Burrows, E. G., *Ethnology of Uvea (Wallis Islands)* B. P. Bishop Museum Bulletin, 145, pp. 116—121 (1937).
- 40) Burrows, E. G., *Ethnology of Futuna*, B. P. Bishop Museum Bulletin, 138, pp. 162—176 (1936).
- 41) Buck, P. H., *Material Culture of Kapingamarangi*, B. P. Bishop Museum Bulletin, 200, pp. 50—77, 281 (1950).
- 42) Emory, K. P., *Kapingamarangi-Social and Religious Life of a Polynesian Atoll—* B. P. Bishop Museum Bulletin, 228, pp. 80—92 (1965).
- 43) ポリネシアでは家屋呼称として主屋をファレ (fale)

というのが一般的であり、ポリネシア外縁からメラネシア・ミクロネシアでもみられる。フィージー (vale), エリス (fale), ニューヘブリデス (vale, fale), ソロモン南部 (vale), シカイアナ (fale, fare), オン
トンジャヴァ (fale), カピングマランギでは hale。炊事棟を hare imu という。ポリネシアアウトライヤーの居住地とは一致するようである。fale の呼称はメラネシアやミクロネシアでは居住棟や炊事棟といれかわったり、男子集会所名称となったりし

ている例がある。fale や炊事小屋 (Umu) の系統の呼称はかなり広範な分布圏をもっている。これは文化の流れなどを探る一つの糸口となる可能性を秘めている。(地図参照)

- 44) Mead, M., An Inquiry into the question of Cultural Stability in Polynesia, House Building Complex, pp. 43—84. Columbia University, Contributions to Anthropology (1928).



居住棟の名称の分布 (諸資料により筆者作成)

4. メラネシア

メラネシアは、ニューギニアからソロモン・ニューヘブリデス・ニューカレドニア・フィージーを含む地域である。この地域の研究¹⁾は、旧ドイツ領域内において、ドイツ学者の業績がみられるが、ポリネシアに比べれば少なく、これから開拓すべき地域でもある。メラネシアではニューギニアに関する研究が比較的多く²⁾、最近では概観的報告の中に断片的にみられるが、広大な地域であるだけに調査密度からすれば非常に空隙が多い。種族による住居や住生活の相異も著しく、複雑な様相を呈しているようである。例えば信託統治領ニューギニア(旧独領)のライ川上流に居住する種族は、男と女の家が別棟であり、(この類例はかなりニューギニア各地で報告されている); 楕円・円形の平面を持つ住居が優占する³⁾。また京都大学や朝日新聞社がインドネシアと協力して実施し

た西イリアン中央高地⁴⁾では、種族によって円形、長方形など平面型に相異のあること。男女別棟や同一棟内における男女室の区別など興味ある報告がみられる。英国海軍が戦略用に編集した『太平洋諸島』⁵⁾(I—IV)にはメラネシアの村落、住居を断片的に示している。ポリネシアに比較して集村が多く、男子集会所などが目立ち、全般に村落・共同体の強固さが窺える。

ビスマーク諸島は H. Tischner のフィールドであり、最近ニューアイルランド島を中心とした詳細な研究が発表されている⁶⁾。H. Tischner の文献目録には、ソロモン⁷⁾、ニューヘブリデス⁸⁾、ニューカレドニア⁹⁾、サンタクルーズ諸島¹⁰⁾に関するものが集録されているが、入手困難なものが多い。ここではその一部のみ示す。最近では慶応大学の中部ソロモン調査に参加した伊藤清司・近森正の考古学的、民族学的調査を基礎とした村落や住居の報告¹¹⁾があり、古くは円形、楕円形平面

の住居が分布していたことを明らかにしている。その他ソロモンでは、I. Hogbin のガダルカナル島に関する調査¹²⁾がある。サンタクルーズ諸島に属するティコピア島は R. Firth の名著で知られており、その中で伝統的な住居について記している¹³⁾。

B. K. Malinowski の文化人類学における原理的問題展開の基礎となったトロブリアント島における調査の諸報告にも住居に関する記録が散見される¹⁴⁾。

フィジー諸島に関しては、建築技術や建築用語を主とした報告がみられる¹⁵⁾¹⁶⁾。属島であるラウ諸島に関しては、南部ラウ諸島の民族誌¹⁷⁾、アメリカ合衆国の人類学者 M. D. Sahlins が約10年の滞在を基礎にまとめたモアラ島の研究¹⁸⁾があり、楕円平面の優占や、建築技術面でトンガの影響の強さが示されると共に、とくに後者の研究は、家族・土地制度をはじめとする社会組織との関連の中で住居を取扱っている。

- 1) Piper., Die Hausformen Melanesiens, Ph D. thesis, Georg —August— Universität, Göttingen (1938).
これがメラネシア全域を対象としたものであるが、Bishop Museum にもなく、オセアニアでは Micro-film がオーストラリア国立大学 (キャンベラ) に保管されているとのことであった (ビショップ博物館文献カード)。
- 2) Haddon, A. C., The House of New Guinea, Festschrift tillägend E. Westermarck, Helsingfors (1912).
Schäfer, A., Haus und Siedlung in Zentral Neuguinea, Ethnos, Vol. 10. pp. 97—114, Stockholm 1945. Ethnos はスウェーデン スtockホルム民族博物館発行の季刊誌。創刊1936年。
Megitt, M. J., House building among the Mae Enga Western Highlands, Territory of New Guinea, Oceania, 27—3, pp. 161—176, 1957. Oceania はオーストラリア, ニューギニア, 太平洋諸島原住民に関する研究雑誌で, 考古学, 人類学, 地理学など広範な分野を含む。シドニー大学が発行所, 1930年創刊, 季刊。
- 3) Aufinger, A., Siedlungsform und Häuserbau an der Raiküste Neuguineas, Anthropos, 35—36, pp. 109—130, 1940—41, (杉浦健一抄録, 『民族学研究』新1—3, pp. 115—119, 1943)。
- 4) 本多勝一, 藤木高嶺『ニューギニア高地人』朝日新

聞社, 1964。この調査に京都大学人文科学研究所の石毛直道氏が参加し多くの資料を採集された。この一部は1969年民族学会, シンポジウム, 住居—物質文化の諸問題—の中で報告された。このシンポジウムには問題提起者として社会人類学から石毛直道, 地理学から筆者, 民俗学から小川徹, 建築学から桜井清彦が報告を行ない, 討論が展開された。(1969年5月11日, 東海大学湘南学会)

- 5) Naval Intelligence Division, Pacific Islands, Vol. I—IV, Geographical Handbook Series (1945).
文献のみによってまとめており, 地域による解説に精粗がある。
- 6) Tischner, H., Bemerkungen zur Konstruktion und Terminologie der Hausformen auf Neu-Irland und Nebeninseln, Festschrift Alfred Bühler, pp. 401—436 (1965).
- 7) Guppy, H. B., The Solömon Islands and their Natives, London (1887).
Parkinson, R., Zur Ethnographie der Ontong Java und Tasman Inseln, Internationales Archiv für Ethnographie, 10 (1897).
Ontong Java は地理的にはメラネシアであるが, ポリネシアからの移住者の居住地であり, 家屋呼称をはじめ多くの文化にポリネシア的要素が認められる。
- 8) Humphreys, C. B., The Southern New Hebrides, Cambridge (1926).
Sommerville, B. T., Ethnological notes on the New Hebrides, Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland, 23 (1897).
- 9) Sarasin, F., Ethnologie der Neu-Caledonier und Loyalty Insulaner, mit Atlas. München. (1929).
- 10) Speiser, F., Kulturkomplexe in den Neuen Hebriden, Neu Caledonien und Santa Cruz-Inseln, Arch. Suisses d'Anthropologie générale 3, 4 (1919—21).
Graebner, F., Völkerkunde der Santa Cruz-Inseln, Ethnologica 1 (1909).
- 11) 伊藤清司・近森正『英領ソロモン諸島における考古学的・民族学的調査略報』pp. 1—114. 慶応義塾大学 (1967)。
- 12) Hogbin, I., A Guadalcanal Society, House Construction, pp. 44—45, Holt, Rinehart and Winston (1962).
- 13) Firth, R., We, The Tikopia, Arrangement of the Native House, pp. 76—82, Beacon Press (1957).

- 14) Malinowski, B. K., *Argonauts of the Western Pacific: An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guiner*, George Routledge and Sons, London (1922). マリノフスキー, 寺田和夫, 増田義郎訳『西太平洋の遠洋航海者』(『世界の名著』59, pp. 59—342, 中央公論社, 1967)。
- 15) *The language of house-building*, Trans, Fiji Society 4, pp. 9—14 (1948/50).
- 16) Roth, G. K., *House building in Fiji*, *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, 84, I—II, pp. 91—102 (1954).
- 17) Hocart, A. M. *Lau Islands, Fiji*, B. P. Bishop Museum Bulletin 62, pp. 119—122, 125—126 (1924).
Thompson, L., *Southern Lau, Fiji*, *An Ethnography*, B. P. Bishop Museum Bulletin 162, pp. 159—174 (1940).
- 18) Sahlins, M. D., *Moala—Culture and Nature on a Fijian Island*, p. 99, University of Michigan Press (1962).

5. ミクロネシア

ミクロネシアに関しては、ドイツ統治の影響もあって、とくにドイツ学者による研究が多くみられる。A. Krämer のマーシャル群島の住居研究はその代表的なものである¹⁾。日本統治時代にはミクロネシア研究が隆盛に向かった²⁾。昭和初期の松岡静雄の全域にわたる詳細な『ミクロネシア民族誌』³⁾、昭和10年前後の矢内原忠雄の『ミクロネシア原住民社会および経済の近代化過程』を研究テーマとした報告⁴⁾、杉浦健一のミクロネシアの土地制度を中心とした諸研究⁵⁾、民具研究家染木煦の『ミクロネシアの風土と民具』⁶⁾などは、ミクロネシア研究にとって特筆すべきものである。

居住様式については、とくに松岡と染木の研究が詳しい。画家でもある染木の研究はギルバート諸島にも及び、精巧な挿画が豊富に用いられ、物質文化に関する貴重な資料となっている。第2次大戦直前には京都大学のポナペ調査が今西錦司を隊長として実施され、ポナペ島の自然と社会を生態学的な面から考察している異色あるものであるが⁷⁾、居住様式を主としたものではない。その他島之夫のマリアナ諸島・ヤップを中心とした実地調査⁸⁾や、寺田貞次の南洋群島実地踏査報告⁹⁾に

住居の記載が詳しく、カロリン・マーシャルにまで及んでいる。

第2次大戦で研究は中断し、しかも主戦場となった関係から、戦後の変化が著しい島嶼が多くみられる。戦後の研究はとくにアメリカ学者の進出が目立つ。A. Spoehr のサイパン島の研究はその代表的なものである。彼は *Chamorro Family and Kinship* の項で住居をとりあげている¹⁰⁾。伝統的な家屋は *Main House* (Guma) と *Kichen* (Korsina) が別棟となっているが、今日では同一棟に集合する傾向があることなど興味深い問題である。その他 F. M. LaBar のトラック諸島¹¹⁾。D. Robin のギルバート諸島¹²⁾。L. Thompson のマリアナ諸島の研究¹³⁾を示すことができる。戦後のわが国におけるミクロネシア研究はポリネシア・メラネシアに比べやや遅れている。しかし居住様式関係以外では、最近牛島巖が興味ある研究を展開しはじめた¹⁴⁾。

熱帯地域に関する住居関係文献目録も出版されているが¹⁵⁾¹⁶⁾、アフリカ・東南アジア・中南米が主であり、熱帯気候への適応、住宅建設、生理衛生面など実用的な研究が多く集録されている。この中で J. ホプキンス大学の D.H.K. Lee は *Geographical Review* に「熱帯湿潤地域における家屋の考察」¹⁷⁾を発表し、地理学のこの方面に果たす役割の実用性を強調している。さらに彼は『熱帯気候家屋の生理学的研究』¹⁸⁾をまとめており、直接太平洋諸島とは関係がないが、熱帯の居住様式を取扱う場合注目してよい研究である。

- 1) Krämer, A., *Der Haus und Bootbau auf den Marshallinseln*, *Anchiv f. Anthropologie*, 31, pp. 295—309 (1905).
- 2) 石川栄吉「オセアニア」(『日本民族学の回顧と展望』pp. 342—349, 日本民族学協会, (1966)).
- 3) 松岡静雄「ミクロネシア民族誌」居住, pp. 505—557, 岡書院, (1927)。
- 4) 矢内原忠雄『南洋群島の研究』岩波書店 (1935)。
- 5) 泉 靖一「故杉浦健一教授と人類学・民族学」(『民族学研究 18—3, 1953])
- 6) 染木 煦『ミクロネシアの風土と民具』彰考書院, (1945)。
- 7) 今西錦司編『ポナペ島—生態学的研究—』彰考書院 (1944)。
- 8) 島 之夫「裏南洋の民家に関する資料」(『地理論叢

- 4, pp. 333—341, (1934)。
- 島 之夫「南洋群島の民屋」(『日本民屋地理』 pp. 115—128, 古今書院, 1937)
- 9) 寺田貞次『新占領南洋群島踏査報告』(1917)。
- 10) Spoehr, A., Saipan —The Ethnology of a War-Devastated Island—, Fieldiana Anthropology, Vol. 41, pp. 219—228, Chicago Natural History Museum (1954).
- 11) LaBar, F. M., Some Aspects of Canoe and House Construction on Truk, Ethnology, Vol. 2 (1) pp. 55—69 (1963).
- 12) Robin, D., Note on Gilbert Island houses and house Construction, American Anthropologist, 48, (2) pp. 284—289 (1946).
- 13) Thompson, L., The Native Culture of the Marianas Islands, B. P. Bishop Museum Bulletin 185, pp. 36—38 (1945).
- 14) 牛島 巖「ミクロネシア諸島民における母系制社会の解体過程」(『民族学研究』 34—1, pp. 40—56, 1969) その他。
- 15) Texas University., Preliminary bibliography of housing and building in hot-humid and hot-dry climates, Special Publication. No. 27 (1953).
- 16) South Pacific Commission., A Bibliography of Tropical Housing, Technical Paper, No. 76, Noumea (1955).
- 17) Lee, D. H. K., Thoughts on Housing for the Humid Tropics, Geographical Review, 41, pp. 124—147 (1951).
- 18) Lee, D. H. K., Physiological Objectives in Hot Weather Housing, U. S. A. Housing and Home Finance Agency. Washington (1953).

6. お わ り に

以上、太平洋諸島における居住様式に関する研究を展望したが、浅学のため優れた研究をみおとしている可能性もある。大方の御批判御指導を乞う次第である。なお文献資料の多くは1965年11月、南太平洋学術調査の帰途約2週間ハワイのビショップ博物館図書室で閲覧したものが中心となっている。我々のため特別室を提供された博物館の諸氏や調査を共にし御指導いただいた藪内芳彦先生に深謝する次第である。